学位論文抄録

ADHDに併存するうつ病
－抑うつ症状と反抗挑戦性の関係について－
(Depression in attention deficit hyperactivity disorder (ADHD) -Relationship between depressive mood and oppositional defiant behavior-)

牛島 洋景

指導教員

池田 学 教授
熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

学位論文抄録

【目的】本研究の目的は、注意欠如多動性障害（Attention Deficit Hyperactivity Disorder;ADHD）男児におけるうつ病の発症過程を明らかにすることであり、そのためにADHDの下位分類ごとに抑うつ気分と反抗挑戦性、年齢の関連について調査を行った。

【方法】我々はうつ病発症過程における注目すべき症状として、抑うつ気分だけではなく反抗挑戦性を評価し、これらの症状と年齢の関連について調査をした。抑うつ気分はBierlson' s Depression self-rating Scale (DSRS) を用いて評価し、反抗挑戦性はOppositional Defiant Behavior Inventory(ODBI) を用いて評価を行った。対象はADHD不注意優勢型（ADHD predominantly inattentive type; ADHD-I)、ADHD混合型（ADHD combined type; ADHD-C）とうつ病とした。ADHDにおける抑うつ気分の特徴をより明確にするために、うつ病を対象に加えた。

【結果】ADHD全体では小学生の2%、中学生の5%でDSRSが高値であった。ADHD-C群、ADHD-I群の小学生、中学生のいずれでも、同程度のDSRSが高値の者が含まれていた。ADHD-Cでは高い反抗挑戦性を示す対象の割合が中学生年代でADHD-Iよりも多かった。年齢の上昇とともに、うつ病群では反抗挑戦性が低下するのに対して、ADHD群においては、いずれの下位分類でも高い反抗挑戦性を維持していた。ADHD-C群においてはDSRSの値とODBIの値が相関していたが、ADHD-I群ではDSRSと年齢が相関していた。

【考察】本研究からはADHDのなかには各年代ともに同程度の割合で高い抑うつ気分を示す対象が含まれており、ADHD群ではうつ病群と違い、いずれの年代でも高い反抗挑戦性が持続することが特徴であった。ADHD-C群では年齢に関係なく抑うつ気分が反抗挑戦性と相関し高まり、ADHD-I群では反抗挑戦性は低下することなく一定の水準で持続し、年齢に相関して抑うつ気分が高まる可能性が示唆された。

【結論】ADHD におけるうつ病の発症過程では、抑うつ気分だけではなく反抗挑戦性についても十分に注意を払う必要がある。